喜多方の発展の歴史

2　喜多方の発展の歴史

（1）古代～中世（縄文時代～弥生時代）

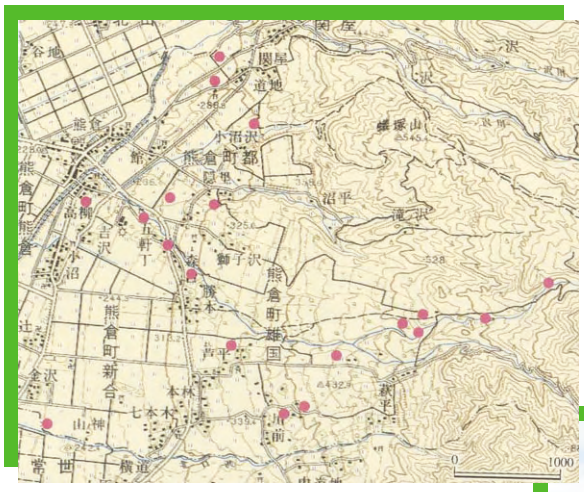
喜多方の夜明け

喜多方の夜明け

喜多方は、奥羽山脈に属する山々、越後山脈に属する丘陵、飯豊山系の山々に囲まれ、田付川（たづきがわ）・押切川・濁川などが形成した緩勾配の複合扇状地に位置し、良質な地下水に恵まれている。

この地には、1万年前ごろから既にこの地方に人が住んでいたと言われている。縄文中期、雄国山麓の扇状地状の緩斜面は、狩猟・採集に適した豊かな自然があり、水の便も良く集落の立地に適していたことから、縄文文化が発展する。その後、水稲耕作が伝わり、低地に集落が増加する。

古墳時代の遺跡としては糠塚（ぬかづか）古墳群や山崎古墳群、熊倉の寺内古墳群などがある。



雄国山麓の縄文時代の遺跡
（資料：図説喜多方の歴史）

糠塚古墳群（県指定史跡）

(2)平安時代

会津に仏教文化が広がる

大同2年(807)に僧の徳一(とくいつ)が慧日寺(えにちじ)を創建し、平安時代の会津に仏教文化が花開く端緒となった。

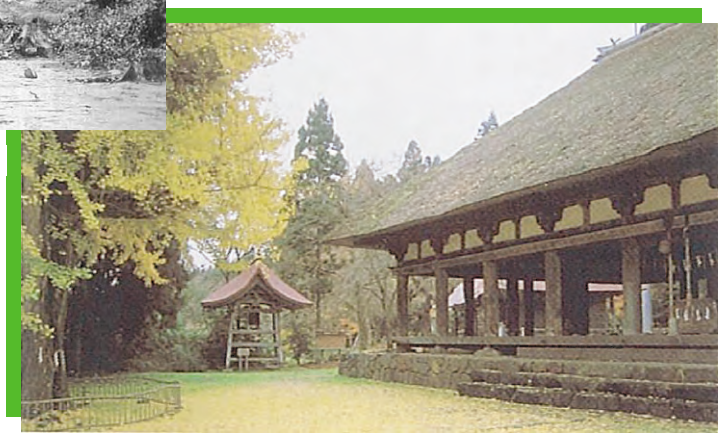
慶徳にある千光寺経塚(せんこうじきょうづか)は、東北最古の経塚であり、経を入れる石櫃の銘によれば、大治5年(1130)、平孝家・源俊邦といった有力者層により造営された。

熊野神社が勧請される

熊野信仰とは、紀伊半島南部にある熊野本宮大社・熊野速玉大社・熊野那智大社の三山に対する信仰であり、当初は上皇や皇族など上流の信仰であったが、やがて身分の差もなく老若男女の信仰も許され庶民へと広がっていった。会津では天喜年間(1053～58)に上三宮町岩沢の熊野神社(本宮(ほんぐう))、慶徳町新宮の熊野神社(新宮(しんぐう))、熱塩加納町宇津野の熊野神社(那智(なち))が勧請(かんじょう)されたと伝えられ、喜多方は、会津における熊野信仰の中心となった。

慶徳にある新宮熊野神社の拝殿は長床で、平安時代末期の貴族の住宅で用いられた寝殿造りの様式と伝えられている。長床とは山伏の道場のことであり、昭和38年には国の重要文化財に指定されている。

新宮熊野神社長床(修理前)



新宮の熊野神社拝殿(長床)

(資料:図説喜多方の歴史)

(3)鎌倉時代～室町時代

芦名氏の会津支配はじまる

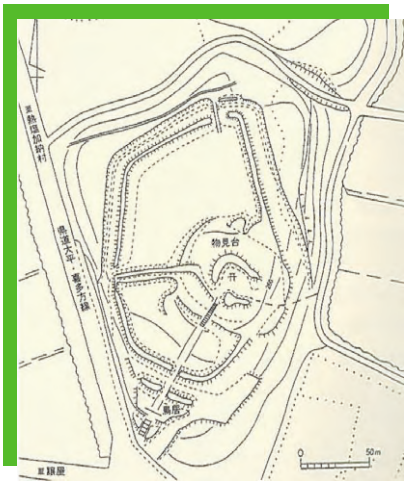
佐原十郎義連（さわらじゅうろうよしつら）は三浦半島で三浦一族に生まれ、文治5年(1189)に源頼朝が奥州平泉藤原氏を滅ぼした奥州合戦の手柄により会津最初の領主となったと伝えられている。喜多方には青山城(現 上三宮町)・新宮城(慶徳町新宮)など領主の居城等が建てられた。新宮氏は喜多方西部の新宮城を本拠として勢力を蓄えたが、その後、15世紀室町時代に黒川(今の会津若松)の芦名氏は新宮氏を滅亡させ、佐原氏も姿を消し、芦名一族が会津盆地から喜多方地方を広く掌握するようになった。

伝佐原義連の墓

喜多方にあった領主等の居城

新宮城之図(明和元５月８日作図『耶麻郡誌』)

新宮城本丸跡



青山城跡(西城)略測図(山崎四郎作図)

青山城跡

(資料:図説喜多方の歴史)

(4)安土・桃山時代

農産物流通の場として、小荒井と小田付で定期市が開かれる

町割りと定期市のはじまり

永禄7年(1564)には芦名盛氏が小荒井の町割りを行い、天正10年(1582)には家臣佐瀬大和(させやまと)が小田付の町割りを行った。

芦名氏の時代に山の民と農村の民が物資交換をするため、中田付村で十二斎の市が開かれ、その後、小荒井・小田付に移された。小荒井村では、永禄7年(1564)毎月2と7の日を市日と定め、六斎市が開かれ、天正10年(1582)この六斎の市日を小荒井村と小田付村で二分し、三斎市となった。時を経て、この定期市が商店となり、まちが形成されていく。

小荒井と小田付の市場は、阿賀川舟運と越後裏街道を通じて、越後ともつながっており、喜多方からは米が、越後からは塩・海産物などが運ばれた。

天正17年(1589)、伊達政宗は芦名義広を破り会津を手中に収めたが、天正18年(1590)豊臣秀吉による奥州仕置で没収された。その結果、秀吉の腹心である蒲生氏郷(がもううじさと)が会津を支配することとなった。

小荒井村初市俵引きの図
(高橋金年画 市内寺町 佐藤弥右衛門 蔵)

蒲生氏郷が領内を把握するために作成した
「蒲生領高目録」に記載されている村

(資料:図説喜多方の歴史)

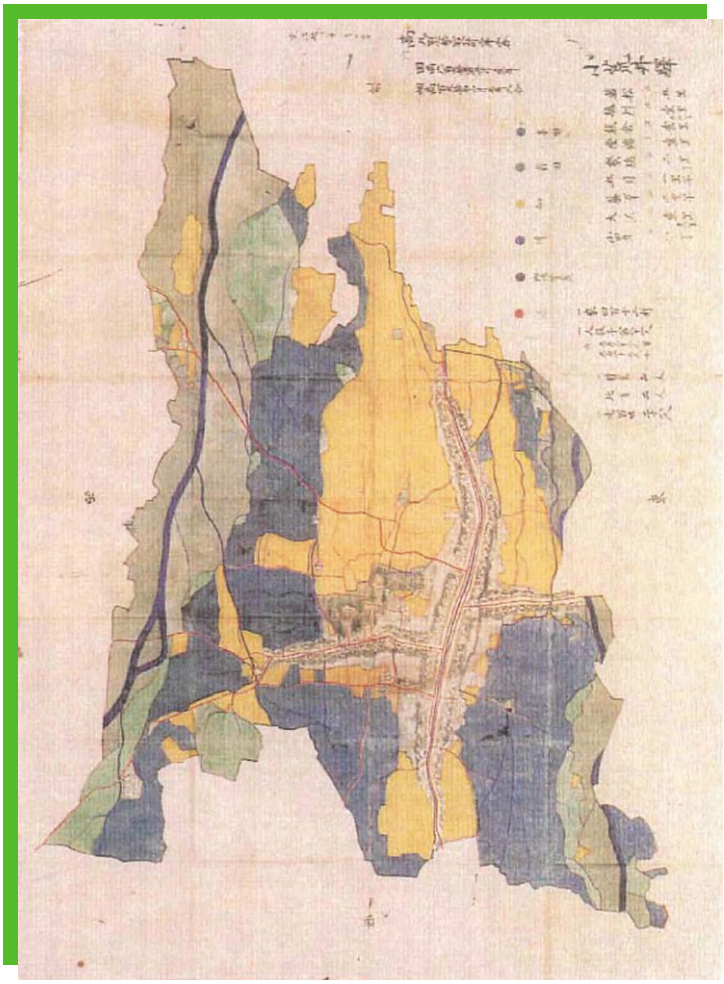
(5)-1近世(江戸時代)

定期市は保護され、喜多方は農村部の都市的空間「在郷町(ざいごうまち)」として発展。

定期市が保護育成される

蒲生氏郷(がもううじさと)は、城と城下町の整備を命じ、武士・商工業者の城下町集住をおしすすめた。一方で、年貢を半石半永(はんごくはんえい)(半分は米で半分は永楽銭で)納めるため、生産物を市場で売る必要が生じ、城下町以外の農村の定期市として、小荒井・小田付などの市が保護育成された。

以後、会津地方では、若松=「城下町」、喜多方=農村部の都市的空間「在郷町」、坂下・野沢=越後街道の「宿場町」として栄えていく。



文化7年(1810)小荒井駅絵図
(資料:喜多方市史)

(5)-2近世(江戸時代)

酒造と醸造業が盛んになる

江戸時代初期から藩が新田開発を奨励したことから、村役人の郷頭(ごうがしら)・肝煎(きもいり)による新田開発が進んだ。

その後、農耕技術の向上により米生産が増加し、年貢の半分を貨幣で納める必要があったため、市場の開設地であった喜多方を訪れる人々を中心に酒の需要があったことから、村役人の郷頭・肝煎や半農半商の在郷商人(ざいごうしょうにん)などの資産家によって、喜多方の良質な湧水を利用した酒造が行われるようになった。

そして麹を使った酒造の技術を応用して味噌や醤油などの醸造業も行われるようになり、この頃から喜多方に醸造のための蔵が建てられるようになる。

北方地方の新田集落
(資料:図説喜多方の歴史)

(5)-3近世(江戸時代)

藤樹学の盛行

寛永20年(1643)保科正之が最上(山形)から会津23万石に入部した。その頃はすでに武断政治から文治政治に移行しつつあった。

徳川幕府は、身分的差別を重視する教学的要素を多分に備えた朱子学を教学の基礎としたが、庶民にとっては観念的で馴染むことができなかったため、実学的な教えである藤樹学が盛んになった。

藤樹学とは、近江国(滋賀県)出身の江戸時代初期の儒学者中江藤樹の教えである。

会津藤樹学は寛文年間(1661～72)に大河原養伯と荒井真庵が、藤樹学の教えを広めていた淵岡山の門をたたき、その後「北方の三子」と言われた五十嵐養安(小田付)、遠藤謙安(上岩崎)・東条方秀(上高額)らにより北方地方を中心に広がっていった。以来、明治初期まで多くの人々によって学び継がれ、北方地方の人々の心の柱となり、会津藩校日新館の教育にも影響を与えた。

中江藤樹先生肖像画

遠藤謙安

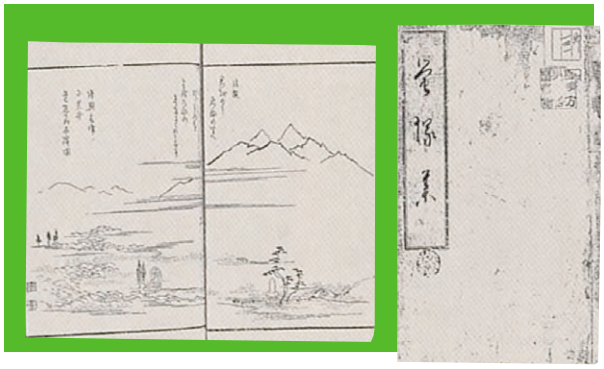
五十嵐養安

(資料:図説喜多方の歴史)

(5)-4近世(江戸時代)

庶民文化の興隆

文化・文政期(1804～63)には、肝煎などの村役人や酒造業者を中心に富裕な農民・商人層が成長し、庶民文化として俳諧がさかんになる。若松城下町や会津各地の俳人たちはもちろん、本宮・福島・仙台の俳人とも交流して「北方俳壇」を興隆させた。



蛍塚集(伊藤朶年　編)

河上集(関本如髪　編)

会津俳諧百家集(伊藤朶年　編)

(資料:図説喜多方の歴史)

(5)-5近世(江戸時代)

喜多方地方の戊辰戦争

文久2年(1862)、会津藩最後の藩主である松平容保(まつだいらかたもり)は、尊皇攘夷派が横行する京都の状況に手を焼いている幕府から京都守護職に任命された。容保は、新撰組を指揮下におき、京都の治安維持を担ったことなどから、薩長軍が圧勝した鳥羽・伏見の戦いの後、幕府方として追討されることとなる。

会津軍は、初戦では善戦するものの、慶応4年(1868)7月29日二本松城の落城の頃から戦況が悪くなり、侵入してきた新政府軍に同年8月23日鶴ヶ城を囲まれた。会津平野が戦場と化し、喜多方でも9月中旬には戦いが繰り広げられ、官軍の退路を断つため小田付は焼かれた。容保は、孤立無援の中で一ヶ月に及ぶ戦闘に耐えつづけ篭城したが、9月22日ついに落城した。

北方地方の戦争経過図
(資料:図説喜多方の歴史)

(6)-1明治

先見の明のあった喜多方の事業家により、養蚕業がおこり、蔵が増加する

喜多方で養蚕・製糸業おこる

小荒井村の小荒井小四郎は、東京の資本を背景にした近代的製糸工場の製造を計画し、郡内に200万本に及ぶ桑苗木の貸し付けを行った。これによりやがて耶麻郡は県内でも主要の繭生産地になった。また、彼が明治6年(1873)に開業した小荒井(喜多方)製糸工場は会津地方での器械製糸のきっかけとなった。しかし、明治末期には経済不況となり糸価が下落、零細企業は淘汰された。

鈴木組喜多方製糸所操業風景
(明治45年ごろの写真)

製絹合資会社の女工さん

(資料:図説喜多方の歴史)

(6)-2明治

大火から蔵の重要性が再認識される

醸造業や漆器業の作業場として蔵が建てられ、喜多方では蔵が増加しつつあった。

明治13年、町の中心部で170戸を焼く大火があったが、その中で蔵だけが焼け残っていたことから住人の蔵に対する認識が高まり、他の地方では珍しい蔵屋敷など、多くの蔵が建造されるようになった。郊外の岩月町三津谷では、レンガが焼かれ、レンガを使った蔵も多くなった。

明治16年には福島県令三島通庸（みしまみちつね）による会津三方道路が開削され、喜多方が新米沢街道の重要な経由地となった。(後の国道121号)

明治20年代の「大善呉服店」(上)
明治40年代の「大善呉服店」(右)

新仲町の「瀬野屋呉服店」明治末期

(資料：図説喜多方の歴史)

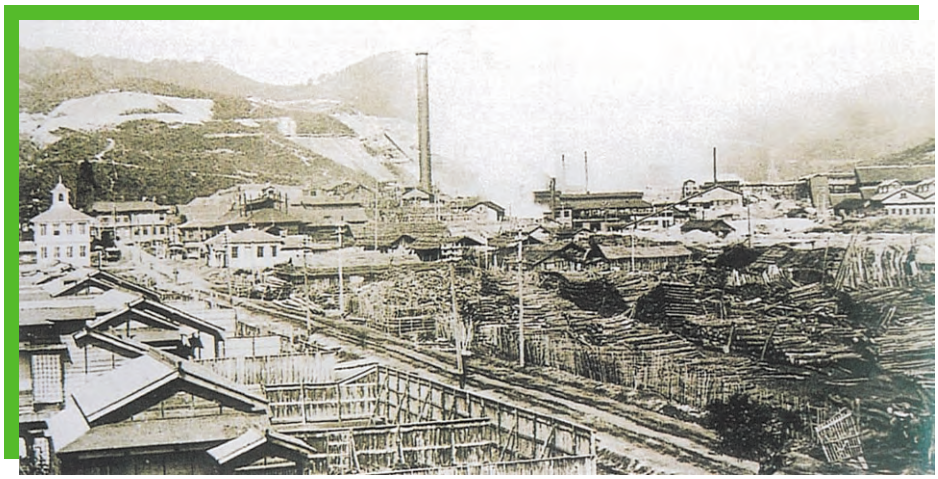
(6)-3明治

小荒井村・小田付村など５村が合併し喜多方町が誕生

明治８年に小荒井村・小田付村など5村が合併し“(北方)きたかた”の読みで「喜多方町」が誕生する。明治１４年、まちの人々の熱心な誘致運動により、耶麻郡役所が塩川から喜多方に移される。

また、明治３８年に加納鉱山(熱塩加納町内)が本格稼働され、一時期全国第三位の銅鉱山となった。人口3,000人を数えた鉱山町が喜多方町の消費地となったことから、この間は大変な好景気となって蔵の増大に寄与した。

明治１７年に再建された耶麻郡役所新庁舎



加納鉱山全景

(資料:図説喜多方の歴史)

(6)-4明治

まちの人々の運動により岩越鉄道が喜多方まで延伸

明治37年、私鉄として喜多方駅まで開業した岩越(がんえつ)鉄道によって、漆器や酒造、生糸などの主要生産物に外販の道が開け、生産が飛躍する。

岩越鉄道は、喜多方を通過しないルート案も出されたが、官民一致の運動と資金提供により、喜多方を経由する延伸が実現した。

喜多方水力電気株式会社は、喜多方町外3カ村への電力・電灯の供給を目的として設立され、明治33年9月に大塩川の水を利用した北山発電所を建設、翌年11月に開業した。

喜多方駅(左)

開通した
喜多方駅前通り(下)

(資料:図説喜多方の歴史)

（7）大正・昭和以降

在郷商人の残した蔵が注目され、ラーメンのまちとして知られるようになる

蔵のまち喜多方

古くからの市場である小荒井や小田付で味噌・醤油・反物・薬種などに関わった業者達や、質屋、酒造業者、漆器業者は、市内に多くの屋敷や蔵を残した。また、かつて農民は勝手に蔵を建てることができず、代官所に伺いを立てて蔵をつくっていたため、その制約がなくなった明治から大正にかけては、一般農家でも蔵を建てることが流行した。
戦後、モータリゼーションや農作業の機械化が進むと、蔵の改造や取り壊しが進んだが、テレビなどのメディアを通じて喜多方の蔵が全国的に知れ渡るようになり、観光客が訪れるようになった。

甲斐本家の蔵座敷

ラーメンのまち喜多方

大正末期に中国人の手でラーメンが喜多方町にもたらされ、昭和50年代末に喜多方市の打った“ラーメンの街宣言”広告戦略が成功し、以来「蔵」と並んで喜多方の観光を牽引している。旧市内には、100軒を超えるラーメン屋がある。

周辺の農産物などを背景に市場のまちとして発展してきた喜多方は、現在、地元の食材や飯豊山地の伏流水をつかったラーメンに農村とまちのつながりの名残が、初市の祭に市場（いちば）の名残が残っている。

(8)まとめ

喜多方は豊かな土壌と水に恵まれ、人々が発展を支えてきた。

喜多方の発展の歴史

喜多方は扇状地で水はけが良く、山から運ばれた豊かな土壌、良質な地下水があった。

この扇状地という恵まれた地形から農業がさかんになり、農産物を交換するための市場がやがてまちを形成していった。この喜多方のまちには、隣県からの商人・職人など様々な人が集まり、醸造業や文化を生みだすとともに、明治になって事業を興すなど発展の原動力になった。

このように、喜多方は豊かな土壌と清らかな水を背景として、まちの人々が発展を支えてきた地域である。そして、その下支えとして物流がある（次ページにつづく）。